

ワークショップ 「学校図書館のできること」

京都外語大学准教授 枝元益祐氏

I 公教育における学力をめぐる考察

PISA型読解に着眼した「可視化できない学力」と学校図書館のクロスロード

(1) 問題の所在及びコンテンツ①…思考力やコンピテンシー、リテラシーなどの客観的に測定することのできない学力の公教育における在り方を考えることを目的とする。

その背景として、子どもを取り巻く学習課題を大別すると、客観的な学力として測定可能な学力と、PISA型読解力やコンピテンシーなどのように思考能力に傾注する学力観とに分けることができる。現在の知識伝達型の学校教育では後者を避ける傾向にあるのではないか。



PISA型読解力に着眼することで、公教育における今日的課題である**学力**のあり方を考える。

(2) 問題の所在及びコンテンツ②…子どもの学びはどのように拡張するか

①学力における公教育と私教育の位相

・学力をとらえる諸側面

知識伝達型教育で、伝達可能な客観的な系統的知識



経験主義のように実践活動の中からの知の生成

・公教育：国全体の課題としての公共性

直接的且つ即物的効果があるとは限らない。

教育者も学習者も不安になる一因。

・私教育：個人の能力の伸張をマーケットとした教育産業としての商品

直接的且つ即物的効果が必要。

市場原理の中で個人をターゲットとした対価

教育者も学習者も対価に相当する客観的な実感

教育現場では、どちらか一方ではなく二元的な関係

☆知能の発達曲線〔流動性知能（記憶力、情報処理力）と結晶性知能（常識や判断力、理解力）の発達曲線〕が提示していること→どちらも思春期あたりまでは急速に発達するが、流動性知能の発達はその後低下する。洞察力や判断力などは経験が結晶化することで、生涯少しずつ発達する。

② 生涯学習の捉え方①

1965年 ユネスコ成人教育推進国際会議による提言

誕生から死まで、人間の一生を通して行われる教育の過程を作り上げ活動させる原理としての生涯教育という構想



Lifelong Integrated Education

市場原理にコミットした個人の能力の伸張を射程とする。

OECD型の生涯教育へと発展（継続教育やリカレント教育へ）

生涯学習の捉え方②

1973年 ジェルピの生涯教育論

生涯教育の主要な軸の一つは、学習とは人間生活の定められた時間と空間（例えば学校）でのみ行われるものではない、という事実。全環境が学習の意義のある装置。



Lifelong Learning

個人能力ではなく、集団での学びに着眼。

ユネスコ型の生涯学習へと発展（公教育的側面の重視）

生涯学習の捉え方③（2つの方向性）

・OECD

生涯にわたっていつでも学ぶ機会を得ることができるよう学校教育システムの弾力化を提案

・フォーラムレポート

社会の全分野に学習機関を拡大し、社会全体が教育的役割を果たす「学習社会」の考え

☆二つの方向性、その収束

ユネスコ

基本的人権としての「学習権」

ドローラ・レポートの教育が寄って立つべき4本柱

「知ることを学ぶ」

「為すことを学ぶ」

「（他者と）共に生きることを学ぶ」

「人間として生きることを学ぶ」

ユネスコ ハンブルク宣言…「学習権宣言」と共に、教育が「排他的特権」であってはならないというポリシーが貫かれている。

「教育」（教育者と被教育者との関係があり、受動的）か「学習」（学習者が主体的且つ能動的に関わる活動）かという議論

（3）生涯学習における学校の役割

「生涯学習の基礎を培う」ために

「教養」の涵養

「自己教育力」や「生きる力」の一部としての教育課題

「経験」を通して涵養

経験の磁場としての学校組織運営の役割

（4）調査の方法論としての質的研究

エスノメソドロジー：理論枠を当てはめるのではなく、実践活動の中から理論や法則を探求するアプローチ

ライフストーリーあるいはライフヒストリー：過去の経験を再構築して意味づけ、変容を喚起する。

ナラティブアプローチ：経験への意味づけ

Ⅱ まとめ

公教育はスキル伝達だけではない。公教育の意義は思考力や洞察力などの結晶知の涵養にある。結晶性故に即効性はない。



学校図書館活動が一過性の活動ではなくコンピテンシー涵養の磁場であるべき

ゼロからはゼロしか生まれない。水路付けが必要。